

奨励金No.1471

20世紀における中国の地方隆盛と革命勢力 ——電信事業を中心に

白鳥 翔子

China's local prosperity and revolutionary forces in 20th century: Focusing on Telecommunication

Shoko Shiratori,



本研究のテーマは「20世紀初頭における中国の電信事業と地方勢力」である。中国の電信事業が地方勢力の台頭をうながしただけでなく、清から中華民国への政権交代にも寄与したことを明らかにしようとするものである。本研究では、電信事業が地方勢力の台頭をうながし、それが清の滅亡につながったのではないかという仮説をたて、辛亥革命（1911～1912）に大きく寄与した省の一つである雲南省を例に、清末の雲南省における電信と経済発展の関係について検討した。

The theme of this study is “China's Telegraph Business and Local Powers in the Early 20th Century”. This study aims to clarify that China's telegraph business not only encouraged the rise of regional powers, but also contributed to the change of government from the Qing to the Republic of China. This study examines the relationship between the telegraph and economic development in Yunnan Province at the end of the Qing dynasty, using Yunnan Province, one of the provinces that contributed greatly to the Xinhai Revolution (1911-1912), as an example.

1. 研究内容

19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国の社会経済には大きな変化が生じた。中国国内では、外国人商人の貿易活動の拡大や、内陸地域への鉄道敷設による内陸産品及び近代的工業製品の輸出入が増加した。さらに日清戦争後に締結された下関講和条約によって、中国国内に外資系の企業の工場が開設可能となった。また国際貿易に関わる必要性から、鉄道・汽船・電信などの交通通信網が整備拡充された。一方、清朝も各省の地方官（総督・巡撫）らが、自身の所轄の省に軍需工場や紡績場、鉱山業などの西洋の技術を取り入れた産業を興した。地方官たちはこれらを利権や権力基盤として抱えるようになっていった。

社会経済の変化によって、地方の省が政治・経済的単位として重要性を増していくこととなった。

反対に、同時期に整備された交通通信網、特に電信については、その完成によって清朝の国家統合に重要な役割を果たしたと説明される。事実、清朝は1912年に滅亡し、その原因となった辛亥革命は地方から台頭した勢力によって引き起こされた。では、この背反した状況はいかにして構築されたのか、今一度検討すべき課題である。電信史研究については、電信の普及が政治・経済の両方に作用し、一定の効果を得たことが明らかになっている。とくに経済面では、近年、雲南省に大きな発展をもたらしたことが示唆されている。しかし残念ながら、これらは雲南省と西洋の国際貿易にも全く言及がないわけではないが、清仏戦争期の国防に関わる電信建設に記述が集中している傾向は否めない。

本研究では雲南省における電信の商業運用につ

いて考えた。雲南省は、清末に鉄道敷設と錫の輸出によって大きな経済発展を遂げた。その結果、地方軍として台頭し、清滅亡後の第三革命（一九一五年、袁世凱が帝政を復活したことに反対して雲南省の蔡鍔らが起こした武装蜂起）で中心的な役割を果たすことになる。その経済発展に電信が関わっていれば、地方軍の財政基盤という、近代中国を考える上で不可欠の大きな視点からも、新たに電信を位置づけることが可能になると考えられたからである。

雲南の電信建設は、一八八五年から始まり一九一一年に全線が開通した。清末の雲南は外国勢力の進出と鉄道整備により、商業的に大きく発展したと説明される。電信はその発展のなかにおいて積極的に利用されていた。しかし、建設当初の段階では、雲南には公式に認められた海外諸国の拠点は無く、鉄道も敷設されていなかった。つまり、雲南では電信建設が先立って行われ、後の経済発展にうまく取り入れられたのである。

その結果、「辺境の地」と評されてきた雲南は、東南アジア・西洋列強との貿易の中心地として経済発展をとげた。従来あまり注目されていないが、ときを同じくして電信費用の改定が行われ商報を送りやすい環境が整えられたことは、そうした雲南の経済発展と連動するものであったと考えられる。

事実、時代は下るが、二〇世紀初頭の雲南省では、貿易の輸出入額がともに増加している。とくに、雲南の錫業は一九一九―二〇年にかけて香港錫価格の暴落で打撃を受けたものの、一九二六年に龍雲政権下での簡舊錫業再編と錫業近代化によって、経営を安定軌道に乗せることに成功した。では電信の状況はどうかと言うと、『統雲南通志長編』によれば、例えば民国十七（一九二八）年度は、収支の差額がおよそ十一万元の黒字だったのに対し、民国二十（一九三一）年度ではおよそ九十万元の黒字となった。この数字を見れば、電信が雲南の貿易拡大とともに通信インフラとして定

着・発展していることがわかる。

本研究の詳細をまとめると、以下ようになる。

①蒙自に電報局が置かれた一八八七年は、雲南がこれから市場開放を迎え通商の要地としてますます発展せんとする時期にあっていた。そして雲南電線における建設ルートの終点は、省都である昆明ではなく蒙自となっていた。とすれば、雲南の電信は蒙自の経済発展をうまく取り込もうとして建設されたと考えられる。

②雲南の電信建設の特徴は、雲南省で不足した建設費を他省の支出で補充していることである。雲南の電信建設ではその費用が綿密に議論されており、資金不足の解決にあたって四川・湖北からの借入れが行われた。

③「辺境の地」と評されてきた雲南は、東南アジア・西洋列強との貿易の中心地として経済発展をとげた。従来あまり注目されていないが、ときを同じくして電信費用の改定が行われ商報を送りやすい環境が整えられたことは、そうした雲南の経済発展と連動するものであったと考えられる。

本研究のオリジナリティは、雲南省における電信と錫輸出を結びつけたところにある。先行研究では、電信が情報伝達手段として社会にいかにして影響を与えたのかについて論じられ、政治面では多くの成果が出ている。筆者は、これらの研究成果を踏まえたうえで、電信が各省で商業利用を見込まれ、実際に多くの利益を上げている事実から、電信事業の経済的影響を考慮する必要があると考えた。そのうえで本研究の特色は、電信事業をその建設から各省による運用にまで注目したところにある。この視点は清朝の交通通信網の形成を捉えなおし、一方で地方の各省がその利益をどのように獲得したのかを解明しうるものである。

2. 発表（研究成果の発表）

論文

白鳥翔子「清末期の電信事業——雲南省における電信建設とその運用を中心に」、『お茶の水史学』

第65号、pp. 73-89、2022年3月

大会報告要旨

白鳥翔子、大会報告要旨・自由論題「20世紀の中国における電信事業の展開と地方隆盛—雲南省を中心に—」、『交通史研究』第99号、pp. 45-46、交通史学会、2021年10月

学会報告

白鳥翔子、20世紀の中国における電信事業の展開と地方隆盛—雲南省を中心に—、第47回交通史学会大会、オンライン、2021年5月15日

書籍紹介

白鳥翔子、書籍紹介・園田茂人・謝宇編『世界の対中認識—各国の世論調査から読み解く』（東京大学出版会）、『中国研究月報』、Vol. 77 NO. 5 (NO. 903)、p 48、一般社団法人中国研究所、2023年5月